

「陣ノ内館跡」からひも解く甲佐の歴史

町指定文化財「陣ノ内館跡」発掘調査レポート

町指定文化財「陣ノ内館跡」は、から5か年計画で、「館跡」の発掘調査を実施しています。今回の調査で、現在までに明らかになった成果についてレポートします。

町教育委員会では、平成20年度

た成果についてレポートします。

豊内の免の山に築造された「陣ノ内館跡」の謎に迫る

「阿蘇大宮司」の居城跡と
考えられてきた「館跡」

豊内にある標高約100mの丘陵台地・免の山にある城跡「陣ノ内館跡」は、昭和55年に町文化財に指定され、平成14、16年度に調査が行われました。

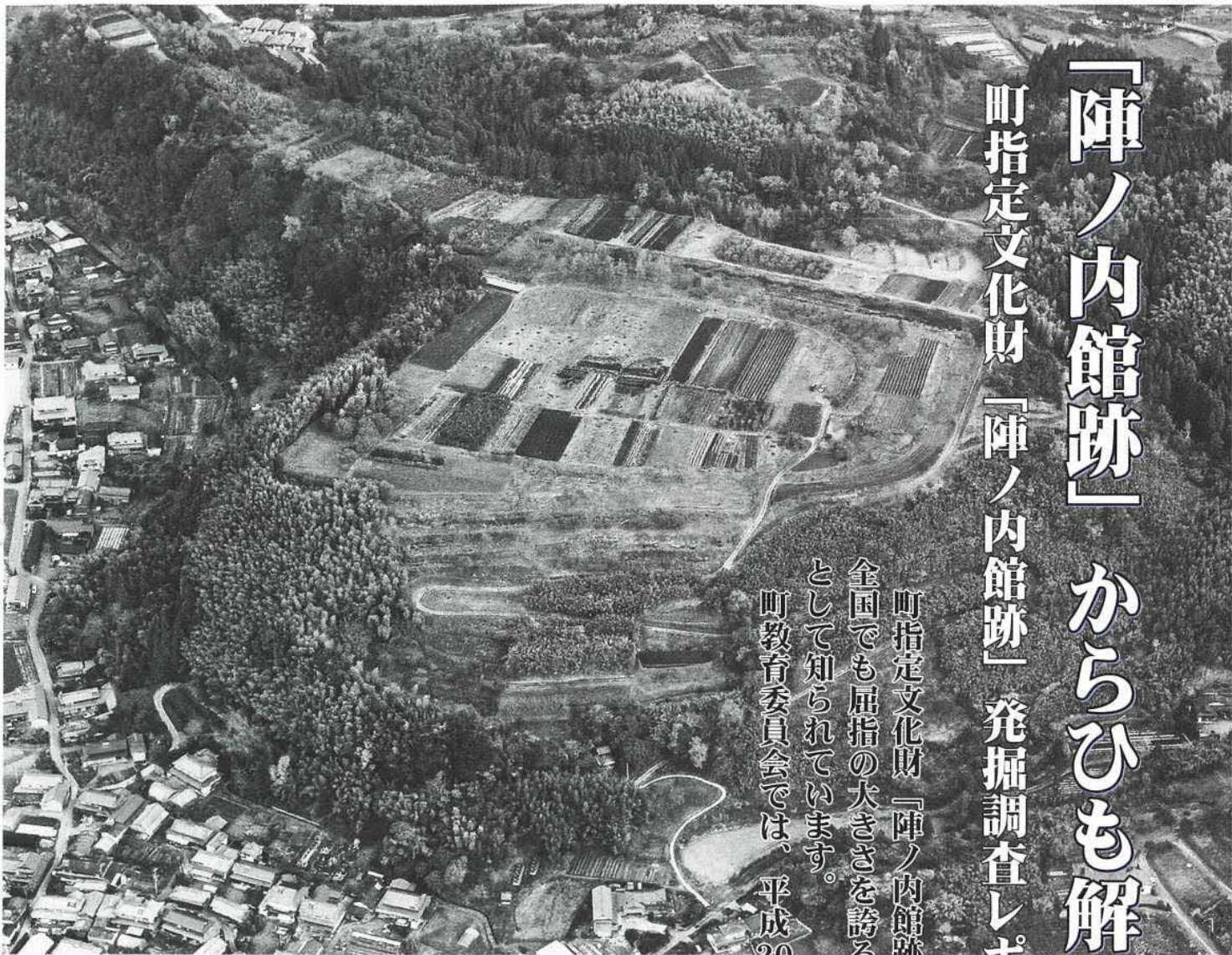
「館跡」について文献資料が残っているものとして、江戸時代に編さんされた『肥後国誌』（下巻）の「陣内館」の項があり、次のように記されています。

これまでの調査での「館跡」の状況は、標高約60mの急ながけに周囲を囲まれた要害の地に、直角に曲がった鉤（かぎ）形の空堀が東西に堀幅約20mで約200m、南北に堀幅約15mで約100mにわたって延びています。

「豊内村ノ上ニ陣ノ内ト云城構の迹アリ阿蘇大宮司惟時ノ館迹ニテ城郭ノ迹ニアラスト云」

また、土塁に面した正方形の区画の平坦部（約30m）には、御殿造りの廊廊（ろうかく）などの館があったのではないかと考えられています。

文中の「阿蘇大宮司」とは、阿蘇神社（阿蘇市）の神主のこととで、同時に阿蘇地域や上・下益城地域を中心に広大な私有地を持った豪族です。当時の地方政治の実権を握り、武士団を組織する棟梁でもありました。このような記述などから、中



甲佐町の新しい財産として 誇れる史跡となるように…



町教育委員会
社会教育課
西口 貴志 主事

平成16年入庁。主に、本町の文化財保護や調査などを担当し、今回の発掘調査に取り組む。

前回行った平成14～16年度の調査での問題は、「陣ノ内館跡」について、時期や意味、役割、位置付けなど分からないことがありました。そこで、今回の調査では5か年で、史跡の時期と範囲の確定、そして構造の解明を大きな3つの柱として明らかにしていきたいと考えています。加えて、町指定文化財として、どういった形で管理や保存、活用ができるのかという点を検討したいと思っています。

調査では、平成20年度は、まず前回調査で発掘した石列について、さまざまな角度から検証しました。1年目の成果は、長さ16㍍・幅1㍍石列の遺構の発見です。これは前回の調査の延長上のもので、溝の中に石を入れてきれいに詰め込んであり、ほかの史跡での事例がないものであることが分かりました。この石列については、平成21年度の調査で、石列遺構は広大な平坦部の中心部分にのみ分布していることが分かりました。また、平成21年度は南北にわたり調査を行ったことで、南側にある空堀を発見でき、「館跡」の広がりや推測できました。

今後は「館跡」の西側のがけの部分が、本当にかげだけが城の防備であったのかという課題を調査する予定です。また、地下の構造物についても、いくつかを抽出してその意味を明らかにしていきたいと考えています。

また、「館跡」全体の範囲がまだ分からないので、空堀の外側にある遺構を確認して、総合的に見ることも必要です。現在の堀などの規模からは、「阿蘇大宮司の時代のものではない」という意見がある事実です。阿蘇大宮司の時期か、あるいは、その後の時期にほかの有力者が造成したのか、範囲を考察することと併せて、出てくる土器などから、時期を確定できればと考えています。

本町は、史跡を活用するために本事業を実施しています。この史跡は、本町のほかの名所に加えて貴重なものとして、町内だけでなく、広く外に向かって影響力を発信できるものだと考えます。「館跡」は、甲佐の中世から近世を現地で体感できる文化財です。子どもたちが史跡について学び育ち、ひいては甲佐に生まれたという誇りになればと思います。史跡を通して、甲佐町の新しい財産を作り出したいと考えています



【写真右】 上空から撮影した豊内・免の山にある「陣ノ内館跡」。平坦部の北側と東側に、鉤（かぎ）形に伸びているのが空堀



【写真左上】 「館跡」の北側に東西にわたって位置する、長さ約200㍍、堀幅約20㍍の空堀

【写真左下】 建築物などがあったと考えられている、丘陵台地の「館跡」平坦部

世（鎌倉時代～室町時代）に、上・下益城地域で権力を振るった「阿蘇大宮司」の館であるといわれていました。
しかし、これらの資料は、館の存在が確認される時期から200年以上も後に作られたことから信ぴょう性に欠け、近年、県内で多くの城跡の調査が行われ研究が進んだことで、城の位置付けについて見直しがなされ、「陣ノ内館がいつ誰によって作られたのか」、「どのような建物が建っていたのか」、「館の縄張りはどこまで広がるか」など多

くの謎が浮上しました。
「館跡」の一端を明らかにするために5か年で調査
町教育委員会では、「館跡」の範囲や時期、内部の構造などを調べて、その謎の一端を明らかにするために、平成20年度から5年間の計画で埋蔵文化財発掘調査を実施しています。
▼調査に関するお問い合わせ先
町教育委員会社会教育課
☎096・234・1111
(内線324)
✉kigt110@town.kosa.lg.jp



【写真右上】平坦部の溝の中に入れられた石の列。発掘したこの部分だけで300個以上の石を確認
【写真左上】上面は高さをそろえたように整い、一部には割れた石や板状に整形された石を発見



【写真中右】石の列が3重になったのが分かる断面
【写真中左】南側で発見した堀を掘り下げる前に撮影。自然に堆積した部分（右側）と掘削後埋め戻した部分（左側）で異なる土の色
【写真下】新発見の南側の堀について、参加者に説明する平成21年度現地見学会



平成20年度の発掘調査では建物部材の石などを発掘

調査初年度である平成20年度には、館の中心とみられる平坦部の調査が行われました。

この調査で、溝状の遺構の中に入れられた石（直径30〜40センチ）の列が、幅1メートル、延長16メートルにわたり出てきました。発掘されたものは、ほとんどが川原から引き上げられた自然の石でしたが、一部に建物部材などに使われたと見られる板状の石や大豆などをひいたと思われる石の破片も見つかりました。

これらの石の列は、初めは建物（掘立柱建物や柵など）の基礎と考えられていました。しかし、県内で同時期に築造されたと考えられるほかの城跡などと同じような例がないことから、町教育委員会では、周辺地域での調査状況と比較検討して、この遺構が一体何のため築かれたものであるのかを考察し結論を導く予定です。

南側にある堀の存在が明らかになった平成21年度調査

平成21年度の調査では、館を中心に、どのような構造物があったのかを把握するため、さらに平坦部を南北にわたり試し掘りしました。

調査の結果、もともと北に位置する箇所（土塁の基礎部分）では、土の堆積（たいせき）状況から土塁を作った過程を確認することができました。

また、もともと南側の箇所では、人の手によって掘られた幅約7メートル、深さ約3メートル、延長100メートル以上にもなる落ち込みを確認しました。

これは、「館跡」の南側の防御を固める堀と考えられます。今までの堀は、「館跡」の北側と東側に延びる鉤（かぎ）形のものだけと考えられてきましたが、新たに平坦部を囲むように「コ」の字形に延びることが発見されました。

さらには、土の堆積の様子から、南側の堀は人為的に埋め戻されたことも分かりました。この堀がある斜面の上には、土塁の残りと思われる土の高まりもあることから推察して、おそらく土塁を崩した土で堀を埋めたと考えられます。

また、このほかに「館跡」の平坦部で出た石の列がどのように広がっているのかを確認する作業も行われました。地面に80センチほどの鉄の棒を差し込み、土の下に何か埋まっていないか、その反応を確認する調査方法を採用しました。この結果、平坦部のほかに新たに「館跡」の周辺

みんなの憩いの場所に、陣ノ内館跡なることを期待



町文化財保護委員

清村 一男 さん

地元・下豊内区長を務めたときから、地域活動を合わせた陣ノ内館跡の保存や調査、利活用に尽力している。

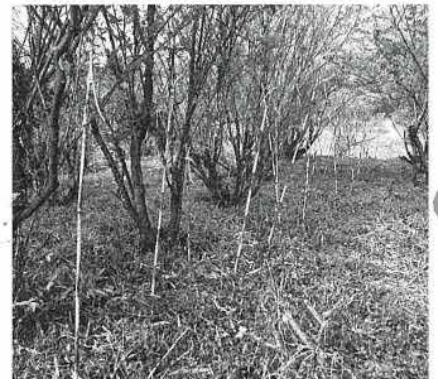
「陣ノ内館跡」に興味を持ったのは、町教育委員会で町社会教育指導員として文化財保護の活動をするようになってからです。それまで「館跡」の足もとにしながら、その価値を知りませんでした。有識者の方から、「中世末期の山城として、あれだけの規模があるものはない。館と言われているけれど、本当は阿蘇氏の本城で、堅志田城は出城である」との説明を聞いて、初めて理解しました。

以前は農業が産業の中心であったため、耕作地から文化財が出ると仕事ができなくなるという心配から迷惑がられたものでした。しかし、「館跡」の土地の半分ほどは耕作放棄地であったため、住民の皆さんにご協力いただき、発掘調査をさせていただくことができました。調査の最初の段階では、空堀の伐採から始めました。地元の人が耕作していたところはきれいでしたが、それ以外は、草が生い茂っていて堀の先は見通せないほどの状態でした。2年ほどで半分ほど伐採が終わり、ようやく空堀や土塁の姿を現しました。

現在は、文化財指定に理解が得られるようになり、標識なども立てることができるほど意識が変わって、文化財を大切にしたい気持ちが世の中に広がってきていると思います。

今回の調査では、『肥後国誌』に書かれている館は「どこにあったのか」が分かればと思っています。これまでの調査の成果については、南側の土塁の存在が大きな発見です。土塁は人間が作った構造物であったことが断定できました。早く年代測定をして、いつの時代のものか確定できれば、今後のさらなる解明にもつながります。ただ、水がめなど生活のにおいのする遺物がまだ出てこないのが残念です。

今後の「館跡」の文化財としての役割への期待として、国指定になってほしいとも当然に思いますが、たとえ指定されなかったとしても広い台地を町内の人々やほかの地域の皆さんが訪れてくれるような「甲佐の憩いの場所」として、史跡を中心に公園などにできれば、多くの人々に楽しんでいただけるのではないかと考えています。免の山は、電線などの人工的な施設が周囲にないので、昔の風景をそのまま残している貴重な空間でもありますので、多くの人が訪れる魅力は必ずあると思います。



〔写真上中〕館跡の南側と土塁の上で反応があった場所。ひもを結びつけた竹を、反応があった地面に刺して記録
〔写真右〕地中の反応を探るために、地面に突き刺す作業で使用する道具。1分ごとに突き刺す作業を繰り返し、反応の有無を確認

部でも反応があり、土塁の上や斜面のすそに列をなすもの、堀の外側に石畳状に広がるものなども確認することができ、館の構造を調べるのに有効な基礎資料を得ることができました。今後は、反応があった場所を中心に発掘調査を行うことで、地下に何があるのかを明らかにしていきます。

県内では、このような調査方法を採用して実施する例は非常に少なく、今回の発掘調査については、ほかの市町村からも調査方法およびその成果が注目されています。以前から「館跡」の広大な平坦地や土塁や空堀の大きさは全国屈指の規模であると注目されてきました。今回の平成20・21年度の調査によって、その規模だけでなく、城の作り方や内部の構造が分かり始め、「館跡」の謎の解明に一步近づくことができました。残り3か年の調査で、さらに深い解明に取り組みます。

今後3か年の発掘調査で「館跡」をさらに深く解明

れています。